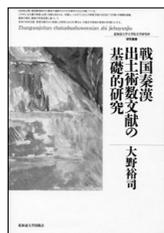


術数文献を用いた出土資料研究

池澤 優

大野裕司著
戦国秦漢出土術数文献の基礎
的研究



A5判 314頁
北海道大学出版会
[本体 7200円 + 税]

今さら改めて言うことではないが、戦国秦漢時代の出土文献が増加するに従い、その中の相当部分が占いに関するものであることが明らかになっていく。『日書』や『周易』など、それらの文献に関する研究は既に十分な蓄積があるが、厄介なのは古い文献は一定の理論に基づく思想でもあり、現実の社会の中で実践された宗教現象でもあるため、文献学はもちろんのこと、思想学、歴史学、宗教学など、多様なアプローチを要求される点にある。本書はそれらの文献を「出土術数文献」の語で呼んだ上で、その総合的研究を行うための基盤を整えようとするものである。第一部「解題篇」と第二部「論文篇」から成る。

解題篇は現在までに出土した術数文献を天文、五行、著亀、雑占、形法の五部門に区分した上で（暦譜は紙幅の都合で省略

されている）、それぞれの出土状況、内容、研究状況について解説を加えたものである。天文以下の五つの範疇は『漢書』芸文志や四庫分類を参照して設定されたもので、そのことが示すように、伝世文献中の「術数」という概念を出土資料に適用することで、一定の範囲の文献をカテゴライズし、その内部における性格を明瞭にするというのが、著者の基本的な法論になる。解題篇は占いに関する概観する上では便利この上ないが、一点、術数文献と他の文献の関係が分かりにくい点が気になった。もちろん個々の出土状況の中で、いかなる文献と同出しているのかは触れられているのであるが、全体的な状況の総括があっても良かったかもしれない。

論文篇は四つの論文から構成される。この部分は、著者の博士論文『出土術数文献の研究』から『周易』に関する三章

を除いたもので構成されている。『周易』に関する議論も読みたかったというのが正直な感想であるが、まずは四つの論文をまとめておきたい。

まず、第一章「睡虎地秦簡『日書』における神霊と時の禁忌」は、『日書』における神霊の性格を論じたものである。日取りの吉凶の占い（択旦）の中でタブーが特定の神霊に関係していることが多々ある。例えば、星（星神。大野氏はそれを後世の術数文献の用語を用いて「神煞」と表現する）の位置や天神の動きが特定の行為の障りになる場合、それらに祭祀を行うことなく、専らタブーを守ることが求められる。一方、祖先・土地神・職能神のような身近な神々は祭祀の対象になるが、祭祀の日取りには規程があり、それを犯すと逆に災いがもたらされる。非択日部分（代表的には『日書』甲種詰篇）の神霊は、人がタブーを犯すか否かに関係なく、恒常的に災いをもたらす点で、性格が全く異なる。

大野氏はこの状況に対しロバート・マレットの議論を援用して理解する。マレットの議論は、エドワード・タイラーのアニミズム説（不可視の霊魂に対する信仰が宗教の起源とする説）に対し、超常的な力（マナ）に対する畏敬の念が宗教の起源であるとするもののだが、天神や星神に関するタブーは、神の力（マナ）に対するものであり、従ってタブーを侵犯す

ればマナの力によって災いをもたらされると考えることができる。もちろん祖先や職能神のようなより身近な神もマナを持ち、故に祭祀によってその力を獲得する必要があるが、両者は畏敬感に程度の差があり、天神や星神は最も畏敬すべき存在であるので、交渉不可能とされ、祭祀の対象にならなかったとする。そして、後世の術数文献の神煞には凶神だけでなく吉神が存在し、後者を利用することで利益を得るという「功利的な態度」が見られるのに対し、出土術数文献には吉神が存在せず、それは神霊に対する畏敬の念を中心とする「原始的な態度に近いもの」であるとする。

第二章「中国古代の神煞」は、第一章でも扱った神煞を通して、術数文献における「天」の捉え方を論じたものである。まず、出土術数文献を後世の術数文献と比較することで、前者の神煞には吉神に相当するものが存在しないことを改めて確認し、それは宇宙の運行が法則に基づいているという認識を反映したもので、天（自然界の法則性）に対する従順、畏敬の念に基づくものとする。その上で、それを儒家の「天」観念（いわゆる天人相関説）と比較し、儒家において「天」意にかなうとは道徳性を体現することに他ならなかったのに対し、出土術数文献は道徳性を求めることは一切ないことを指摘する。それは儒教の天人相関説が為政者（君主）を対象と

中国年鑑2015

◎5 月末刊行◎

中国研究所 編・発行

毎日新聞社 発売

1955 年創刊。現代中国に關する最新・基本情報満載の、一国を扱う珍しい年鑑。

B5 判 約 500 頁

価格：18,000 円＋税

◆特集＝権力集中を進める
習近平政権

格差の拡大、腐敗の蔓延、大国外交等、内外で権力に対する不信が強まる中国。習近平主席は毛沢東・鄧小平のなかりスマ権力者を目指しているのか。中国の現状理解に欠かせない基本情報を提供。

◆動向

政治、華人社会、対外関係、経済、対外経済、文化、社会

◆要覧・統計

国土と自然、人口、国のしくみ、軍事、少数民族、国民経済・国民生活、農業、工業、資源・エネルギー、交通運輸、対外経済、知的財産権、労働、暮らし、社会保障・医療制度、環境問題、NGO・NPO、教育、宗教ほか

◆資料

統計公報、重要文献、主要人事、2014 年日誌ほか

※お問い合わせ・ご予約は
中国研究所事務局まで

一般
社団法人 中国研究所

〒112-0012

東京都文京区大塚 6-22-18

TEL: 03-3947-8029

FAX: 03-3947-8039

e-mail: c-chuken@tcn-catv.ne.jp

URL: <http://www.chuken1946.or.jp>

するものだったからであり、術数的な天道観は身分にかかわらず、全ての人が共有するものであったと論じる。

中国思想の中で最も重要と言える「天」の思想について、「天」理解は実は一様ではなかった。「天」の理法を道徳性とする理解と、より物理的法則に近いものという理解が併存していたという指摘は極めて貴重であり、本書の最大の達成であると評しても良いであろう。私事であるが、評者も最近、或る事(事)がきっかけで、この二つは基本的には区別した方が良いという認識に達したところである。その価値を認めた上で、更なる研究の進展のために幾つかの指摘を行っておきたい。先ず、この二つの天道観を区別すべきであるとしても、それは判然と区別できるのか、両者は地続きではなかったのかという問題である。儒家的天道観における道徳性とは目に

見えるものではないから、道徳的な人格を体现するとは、実際には礼の規程に従うことになる。礼が何かをやるべき／やるべきでないという規程するものである以上、それは結果的に術数的なタブーとそれ程遠くないことになるのではないか。

第二に、大野氏の所論には実はマレットの畏敬の理論はフィットしないように感じる。というのは、マレットは「超自然的」(普通でない)ものに対する畏敬(awe)が宗教の根源であるとしますが、術数的な天道観は「超自然的」ではなく、「自然界における規則的・循環的運行」(一九五頁)の法則を中心とするものだからである。出土術数文献の「畏敬」は「超自然」ではなく、「自然」に向けられていたのではないのか。そのことと関係するが、第三に、著者は神煞という「神靈」をどのように理解するのだろうか。それが例えばキリスト教

のエホバのように自然から超絶して、意志的に全てを定め得る存在なら、超自然的、と言い得る。しかし、神煞が「天」の理法を象徴する「いわば符号」（二七八頁）であるなら、全く性格が異なる。両者を「神霊」という言葉で括ることは妥当なのだろうか。第四に、出土術数文献の「畏敬」は後代の術数文献に対しては「原始的」であるかもしれないが、中国宗教史全体の中では「原始的」とは言えない点である。この点に関しては、そもそも「原始的」であるとは如何なることなのかという問題があるが、それは措いておくとしても、自然の中に法則性を見いだして理論化し、それを「畏敬」する態度は相当に新しいと言えるのではないか。第五に、第一章において、天神・神煞／身近な神／崇る存在を区分したのは卓見であるが、祭祀するか否かが「畏敬感」の程度により決まるというのは説明になっていない。というのは、程度の差であるなら、その程度に見合った祭祀を設ければよいからである。祭祀されるかされないかは、程度ではなく、質の差（神霊としての性格が異なる）なのではないか。最後に、睡虎地『日書』詰篇の神霊（崇る存在）を「畏敬感」の視点からどのように整理するのか、一言説明が欲しかった。

第三章『日書』における禹歩と五画地の出行儀式』は、睡虎地『日書』出邦門篇を始め、著者が「禹歩五画地法」と

呼ぶ、出行における儀礼を扱い、先ず、この儀礼が、禹歩、禹符、五画地（十字を切るしぐさ）の要素から成ることを確認した上で、その諸要素が後代の資料にどのように継承されたのかを明らかにする。もともと禹歩は辟邪法の一つであったが、葛洪が重視したために、道教の中で複雑なものに発展していった。そのため一般人向けの唐代の儀礼書では禹歩を省略して、五縦六横（縦に五、横に六の十字を切る）を中心にした簡略な儀式を設定し、それが明清時代の速用縦横法という儀礼に固定化していったとする。その儀礼は基本的にやむを得ず凶日に出行せざるを得ないときに、邪を祓うために行われるものであり、そのため出行の凶日を挙げる占文の後に置かれるという共通した特徴を有していたのであり、それは『日書』でも同様であると論じられる。

なお、『日書』の出行儀礼は工藤元男氏がかねてから研究しており、本誌でもかつて紹介したことがある（『東方』三七六号、二〇一二年六月）。本書では工藤説との差を四点に要約しているが（二四五・六頁、注（67））、最も大きな違いは、工藤氏が行神祭祀を含めた出行儀礼全体の一部として本儀礼を位置づけているのに対し、著者は本儀礼は凶日に出行する場合の辟邪法であり、行神祭祀と別のものと位置づけていることである。

第四章「玉女反閉局法について」は、やはり出行の時に辟邪のために行われる玉女反閉局法（日本の陰陽道の場合は反閉）という儀礼を論じる。第三章で明らかにしたように、術数文献における出行儀礼は途中で禹歩の要素が消失し、五縦六横を中心としたものになっていくという推移があった。しかし、宋代以降の文献に見える玉女反閉局法には禹歩が含まれており、それを唐代の文献と比べるなら、もともとの玉女反閉局法は反閉局という陣を描き、その中で算木を動かすものであったのが、後になってそれ以外の要素を取り込んだときに禹歩も含まれたことが明らかにされる。当該儀礼にかかわる諸文献の比較、校勘も行われており、地味であるが堅実な研究であると評し得る。

大野氏は秦漢時代の出土文献と後代の術数文献を関係づけ、時代的な変化を明らかにすることに最も意を注いでおり、その点は成功していると言えよう。確かに出土資料の理解に資するために、術数文献自体の性格を明らかにしていくことは必要であり、今後も研究を更に精緻にさせていくことは望ましい。但し、出土術数文献をそれ以外の出土資料の中に位置づけることも同様に必要であり、今後、その方面にも研究を進展されることを希望する次第である。

【注】評者のところの大学院生である馬場真理子氏は、二〇一四年一二月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文『古代日本における「天」の思想』の中で、日本における天命思想の受容を論じ、術数的な天命観を機械論的と呼称した上で、儒教的な天人相関説とは区別すべきことを指摘した。

（いけざわ・まさる 東京大学）

漢字・漢文指導入門講座

- ▼期日：8月3日（月）10時00分～15時10分（9時45分受付）
- ▼会場：湯島聖堂内斯文会館講堂（東京都文京区湯島1-4-5）JR御茶ノ水駅下車 徒歩2分、地下鉄千代田線新御茶ノ水駅下車 徒歩2分、地下鉄丸ノ内線御茶ノ水駅下車 徒歩1分▼主催：全国漢文教育学会▼後援：文京区教育委員会（申請中）▼資料代：一〇〇〇円（学生五〇〇円）▼定員：60名 *メールにより、先着順で受け付けます。当日の申し込みも可能です。▼プログラム：開講式 挨拶 安居總子（本学会副会長）／「漢文訓読入門」講師 塚田勝郎（筑波大学附属高等学校）／（昼食、休憩）／「漢文の学習指導」講師 菊池隆雄（前・鶴見大学）／閉講式 挨拶 本学会役員▼申し込み先：residence@okhtaki.jp（事務局・真鍋）*申し込みは、メールでお願いいたします。▼問い合わせ先：090-1888-9943（事務局・真鍋）